
喫茶店

ごはんエロス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

喫茶店

【コード】

N9418B

【作者名】

ごはんエロス

【あらすじ】

喫茶店で、親友の良夫とたけしが言い争いをして周りのお客さんが迷惑してる、という感じの、これはなんというのだろう、一応、コメディ・タッチだけど、ちょっと違う。特に、途中の、自然主義リアリズムやまんが・アニメ的リアリズムを語った箇所は説明不足でわけわからんかもしれない。東浩紀さんの「動物化するポストリアリズム2」を読むとわかりやすいと思います。講談社現代新書。ぶっちゃけ、この本は面白いです。ごはんライスの作品なんて読んでも場合じゃない。ほんと。（削除希望作品）

(前書き)

さあみんな。席についたかな。シートベルトはきちんと締めたかい。締めないと振り落とされちゃうよ。あ。ここから。ポップコーンは持ち込み禁止。ダメ。ダメ。ぶちまけちゃうよ。

「おい！　なんで持ってちゆうの!?!」

「え？　なに？」

良夫は目がクエスチョンになっていた。たけしは頭からツノが生えている。

「なに、じゃねえよ。勝手に持ってくなつていつつも言ってるだろ
う」

良夫には何が何やらさっぱりわからない。一体、俺が何を持って
いった。

「いや、そんなこと言われても……なに？」

「あーもー！　てめえ、いいかげんにしろよ！」

いいかげんにしてほしいのはこっちの方だぜ……と、良夫は
少し逆ギレしてきた。

なにやらようわからんが……俺が何かを持っていつちやって
で、まあ、たけしが困ってる、怒ってる……それはわかる。ヤ
ツの顔を見れば解る。目がつり上がってる。これが、営業成績なら
ば……と思いつつも、それはどうでもいい。だって、カンケー
ない。

そうじゃなくて、たけしが怒るのはわかるのだけでも、しかしや
な、怒るなら怒るで、その理由をはつきりさせてほしいちゆうか・
・ぶつちやけ、何を持っていった、いや、持っていかれたつちゆう
んや！　お前は！　俺に！

腕を組みながらうなる良夫の前で、たけしのイライラはピークに
達したようだ。

「てめえ！　返さねーつちゆうんなら、あのこと、てめえの妹にバ
ラすぞ！　いいのか、良夫おお」

良夫はますます目がクエスチョンになってきた。いや、クエスチ
ョンというより、すでに、ほんまのクエスチョンになっていた。あ

の、マンガでよくあるクエスチョン、目の中にクエスチョンの二文字・・・これは小説である。文学である。そんなことはありえない。それは明らかに、自然主義リアリズムの伝統に違反する。下手したら罰金を払わねばならない。

考えてもみよ。実物の、実物の、リアルな男の目の玉の中に、マンガのクエスチョンの二文字、描き文字が描かれているなど・・・そんなことありうるだろうか。いや、ダンボールで切り抜き形づくりムリヤリ目にはめこめばありうるかもしれない。ありうるかもしれないが、しかし、しかし・・・

気持ち悪いじゃないか！

そんなもん！

ちよつと想像してみたが、そんなのはダメだ。紫式部がもし読んだら何と言う。

「クエスチョン、て何ですか？」

うるせー黙れ。そういうことじゃねえ。わかるだろう。お前も日本を代表する文学者ならば！

「・・・わかりました。平安時代のあたくしにクエスチョンを理解せよというのが乱暴な意見だ、ということは、確かにまあそれはそうかもしれませんが、それはとりあえず、脇に置いときまして・・・クエスチョンですか。うーん。難しいですね・・・」
だろう。

「でも、いいじゃないんですか。あたくし、好きですよ。そういうムチャクチャな感じ、正直、キレイじゃないですよ」

そ、そんな・・・式部ちゃん。あんた、そんなこと言われた日にゃ俺は・・・いいかい。冷静になってくれ。例えば・・・
「例えば？」

例えば、東浩紀が言ってるように、ゲーム的リアリズムの世界なら解るよ。ゲームをベースにした小説・・・とか、それなら、そういうことも可能かも・・・いや、そこまでいかなくても、大塚英志が論じてた「まんが・アニメ的リアリズム」の世界。これならば、

ありうるよ。うん。大いにありうる。

「どういうこと?」

例えば、そうだな、ハルヒがね……

「ハルヒって誰?」

ハルヒも知らないの。今、めっちゃ売れてんだぜ。文学者のくせに、ベストセラーくらいチエツクしとけよ、バカ!

「なによ。バカって言わないで。あたくし、平安朝のギャル作家ですのよ……21世紀の文学なんてわかるわけないじゃないの。てゆうか、読めないの。死んでるんだから……」

あ、そうか。

「それなのに、それなのに……しくしく。ひどいわ。ひどいわ。良夫さんのバカ……」

わ、わ。ごめんよ、式部ちゃん……あわわわわ。どうしよう。どうしよう。

「はやく、ハルヒの説明して!」

う、うん。でも、俺、ハルヒ読んだことないの。

「え? ないの? ズコー! てめえ、そんなん、よくも、よくも……!」

わ、わ。ごめん。落ち着いて、落ち着いて。

「うるせー殺す」

ちよっと待って、カンベン。ごめん。わ、いかん。女の子が、グーはいかん。グーは。わ、わ、ぎゃああああああああ。

良夫は、紫式部にすっかりコテンパンに叩きのめされてしまった。気分になっていた。

我に返っていた。

前を見れば、たけしがもう爆発寸前である。

「やい! コラ! 良夫! てめえは、困ったことがあるとすぐワールドに入る悪い癖がある! やい、コノヤロウ! この、すつとこどつこいの、お湯を入れたまま食う日清焼きそばUFO野郎!」
わけわからん。たけしは、テーブルの上に置いてあった灰皿をつ

かみ取り、良夫に向かって投げようとした。

「わ、やめる。たけし。いかん、いかんよ。ここ、喫茶店だぜ。喫茶店でそんなことしちゃいかん！」

「むう……」

たけしは、ドカツとイスに腰を下ろした。

「まあまあ落ち着いて落ち着いて。お前の悪い癖はそれだよ。キレると見境がない。すぐに、暴れて解決しようとする。そんなんで物は解決しないよ……」

良夫は、レモンティーをチューと吸った。

「くそ。てめえに説教されるとは思わなかったぜ。で何だっけ。ああ、そうだ。思い出した。てめえ、なんで、すぐにアレ持ってたやうんだ！」

ひー。また、ふり出しに戻った。かんべんしてくれえ、と心の中で絶叫する良夫。こいつは本当にしつこい奴だ。だいたい、アレって何だよ。わかんねえよ。その、アレ、というのをゆってくれよ。ゆってくれたら、持ってくるよ。

「持ってこねえと、てめえ、マジであのこと、妹にバラすからな！」

もうやだ。カンベンしてくれ。あのことって、いったい何だよ。

わかんないよ。わかんないのにバラされても、なんのっちゃわけわかめだよ。カンベンしてくれ。

良夫はまた目がクエスションになってしまった。

今度は、自然主義リアリズムのクエスションではない。それは気持ち悪いのでやめた。今度は、まんが・アニメ的リアリズムのクエスションである。よく見れば、二人とも、いつのまにか、リアルな実写の二人から、アニメちゅうかマンガちゅうか、そんなカンジのコミカルな二人になっている。

ゆえに、口調も何かマンガちゅうか変になってきた。

「もーよっちゃん。ぼく、もーチミのこと、ゆるちまちえんよー！」

「いやん、いやん。たけちゃん。そんな、いけずなこと言っちゃ、よしお、いやーん」

これがマンガなら・・・と、喫茶店のマスターは皿をふきながら、二人の様子をのぞき見ている。

まあ、自然なセリフであろう。そして、ああいう、ちょっとおかしいな口調の方がおもしろくて、読者もついてくる・・・

そう、マンガなら・・・

マスターは、ため息をついた。

しかし、これはマンガじゃない。

マンガならば、二人が、あのように、奇妙なコミカルな言い争いをしていれば、まわりのお客さんたちも、

「おい、やめろよ、君」

「やれ、やれ」

「お母さん、なーに、あのおじちゃんたち。泣き叫びながら殴り合ってるよー」

「これ、みつおちゃん！ 見てはいけません！」

とまあ、大ドタバタが展開されることも十分ありうるであろう。

しかし、これは、マンガではない。

いや、正確には、彼ら以外は、マンガではない。

彼らは確かに・・・がんばった。

がんばって、マンガのキャラクター化に成功した。こつから、こつで見ているても、十分、成功している。動作といい表情といいセリフまわしといい、十分にマンガのキャラクターだ。これが映画化された日には、立派なアニメ作品として世間を圧巻するであろう。

しかし、残念ながら、まわりのお客さんは、まだマンガのキャラになりきれていねえ。自然主義リアリズムのキャラのままだ。本物の人間だ。生身の人間だ。

だから・・・

イライラし始めている。

そりゃそうだ。

生身の人間が、喫茶店で、あんなにもコミカルにダイナミックに絶叫しながらケンカしてる二人を許すわけがねえ。

彼らは、何も、良夫とたけしのドタバタに参加するために店に来てるわけではないのだ。

お茶を楽しんだり、おしゃべりを楽しんだりするために店に来てるだけなのだ。

良夫とたけしの隣の席に座っていた女の人がブルブル小刻みに震えていた。

たけしと良夫は気づかない。

あまりにも微妙な震えだったからだ。

ドタバタに微妙は似合わない。

たけしと良夫の動きはますますヒートアップし、そこだけピックアップすれば、今にも、週刊少年ジャンプで通用しそうな勢いであった。

しかし、そこ以外の空間はますます重くなっていた。

たけしたちの勢いに反比例して、ますますリアルに、

「なんだこいつらは」

「なぜマスターは、こいつらを注意しないんだ」

という、そういう空気につつまれていた。

マスターも困っていた。

「まいったな……」

そう。こつから、ドタバタになるか、それともリアルな自然主義リアリズムにとった文学にしてくか……すべて、彼が主導権を握っていたのである。

しかし……

考えてもみれば、これは少し酷なことではなからうか。

なんとなれば、マスターは、喫茶店のプロではあるが、文学のプロではない。そんなこと任されたって、どうすることもできない。

マジで困った。

よく見ると、女の人の持っているティーカップがカタカタ揺れている。

まずい。

マスターはあせった。

これは確実にドタバタになる。

女の人は、カップを二人の顔にぶちまける。そんな予感がする。なにがまずいか、といえば、お客さんにそんなことをさせてはいけない……というのももちろんあるが、マスターが一番恐れていたのは、果たして、まんが・アニメ的リアリズムの二人と、自然主義リアリズムの女性がぶつかり合った時に、一体、どんな、アクシヨンが展開されるというのか。

まったく未知数である。

恐ろしいことになることだけは間違いない。

昔、「ロジャーラビット」というハリウッド映画があった。これは実写とアニメを組み合わせた実験作である。

主人公のウサギ、ロジャーが、まあ、こいつは、アニメなんだが、こいつが、本物の水を口からピューと噴き出すシーンがある。

これはどうやって撮ったかというと、ホースでピューって水を出してるシーンをまず撮り、そのホースの上に、アニメのロジャーをかぶせる……という、あれはうまいねえ。うん。ホント。手塚治虫がうなつてたのも、うなづける。だって、ホント、リアルだったもん。ロジャー、水噴き出してたもん。すごかった。あれはすごかった。

マスターは我に返った。

い、いかん。逃避してる……あれは、映画の話じゃないか。

映画なら、すごいで済ませることはできる。しかし、これは、現実なんだぞ。トリックも何もありませんねえんだ。

マスターは、これはもう耐えられん、と思つて、注意にいく態勢に入った。

良夫とたけしの声はますますヒートアップしてる。

女性は静かに静かに、しかし、それでも、確実に怒りを表現し始めている。

女性だけじゃない。まわりの客もみなそうだ。

もし、ここに、筒井康隆先生が、来店した日にゃ……恐ろしくって、想像できねー！

しかし……

マスターはこんなことも思う。

あの女性……名前、何ていうんだろう。

毎日、来てるよな。近所でホステスしてるってことは知ってるけど……キレイな人だな。夜来る時は、ケバい格好で、なんだか、典型的なお水の人って感じがするけど、まだ、若いんだろう、染まってるいんだろう。休日になりゃ、TシャツにGパンに薄化粧って……なんだかいまどきの女の子になって来るんだな……

ん？

とマスターは思った。

おい、これいいじゃん！何か、自然主義リアリズムの感じになってきたじゃん！

ちよつと、マスターはうきうきしてきた。

ここで、俺が、あのトリッキーな二人を、

「すみません……ほかのお客さんに迷惑ですので……」

とやれば

「お嬢さん、ごめんなさいねえ。たまにああいう変なお客さんもいますからね」

とやれば

いや、やったらどうなるってもんでもない。やって、

「あら、お兄さん、気になさらないでくださいな。あたし、お店でああいうのには慣れてますから」

「はあそうですか……」

「今度、お店に来ませんか？」

「はあ、しかし……ぼく、行ったことないんで……」

「うふふふ。大丈夫ですよ。あたしが、うまいことしてあげる。ふふふ」

「ほえー」

なんちゃって、それも、なにがなにやら、マンガやなー！
マスターは我に返った。
そつという問題じゃない。

こんなの喫茶店じゃない。

喫茶店はドタバタを許すわけにはいかないのだ。ほんわか楽しい
雰囲気になくは店がつぶれるのだ。

マスターは、二人の方に向かった。

「よしーお。ドゥユーアングーステインド？ おまーえ、ほんまー
に、わかってけつかるねーん？」

「OH YOU！ おまーえこそー、なんでカタコトゆってけつか
るねーん！」

相変わらず、ハイテンション。

実はギャグマンガ好きのマスターにとって、この状況はぜひとも
維持したいところであった。

しかし、ダメだ。

これは、現実なのだ。

いや、ちがう。

お客さんのことを考える。

俺は、喫茶店の主だ。ギャグマンガ家じゃない。二人のドタバタ
行為を止めぬことには、店の経営が成り立たねえ。この小説の読者
を楽しませる。そんなことは作者に任せておけ。俺の仕事じゃねえ。
俺は、とにかく、お客さんに、ゆっくり落ちて着いた雰囲気で食事を
したりおしゃべりをしたりさせてあげなくちゃいけないんだ。

竜彦。すっかりしろ。お前が、二人のドタバタを止めれば、この
小説の読者が悲しむだろう。しかし、お前が、二人のファンキーな
やりとりを止めなければ、この店にいるお客さん、とりわけ、あの、
美人の女の子を悲しませることになるのだぞ。いいのか。それでい
いのか、竜彦！

マスター、いや、竜彦は、たけしに声をかけようとした。

女の人の方をちらちらと横目でみながら。

晴れ渡る空。

どこまでも続く空。

女の人は、見上げた。そして、笑い出した。

「あっはっはっは。サイコー！」

女の人は最近いやなことが続いていた。お店で知り合ったヘンテコなハゲオヤジにストーキングされるわ、親にお水やってるのがバシケンカするわ、カレシの会社が不渡りを出して倒産して、ずっとヒモしてるわ、してるわってゆうか、家事もしないし、すでに二トになりかかるとるわ……

「ふふふふ。でもあのマスター、本当に……」

女の人はマスターの童彦の顔を思い浮かべながら思った。
すごいギャグセンス持つてるわ……。

その時、なぜか、きゅんとなってしまった。

「ま、まさかね……」

女の人は、あわてて、ハイヒールをカツカツと立てながら、二ト野郎の待つアパートに向かった。

その頃、喫茶店では、よしおとたけしがマスターに首をしめ上げられていた。

「おれのおおー！おれの恋がああーうおおおおお」

「ぐふ……く、苦し。マ、マスタ、かんべ……」

「マスター！ やめて！ たけちゃん、死んじゃうよ！ お願い！」

「うおおおおー！俺の恋、恋、こおおお。うおおおおお
おおおおおおおおおおお」

まわりのお客さんたちがそれを見てげらげら笑ってる。

なんか知らんが、キャップをかぶったひげツラのオヤジが、ドリンクバーの陰から、メガホン振り回しながら怒っているぞ。

「マスター抑えて！ 抑えて！ もっと自然に！ もっと自然に！」
(了)

(後書き)

読み返したら、途中、マスターが「皿」をふいていた、が、「皿」をふいていたになつて、あわてて直した。こ、怖え。たぶん、原稿用紙のをトレースしたから何も考えずに入力しちゃったのだろう。PCではありえん誤字だ。「沙羅」をふくとかならありうる。沙羅というのは今人気急上昇中の人気アイドル沙羅ちゃんのことネ。誰やねん。なんかやらしいなあ。やらしいぞ、そのミスは。いかん。誰いかなよ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9418b/>

喫茶店

2009年6月15日22時01分発行